

バーナード・ショー学者のロレンス先生

島 村 東太郎

1. はじめに

ロレンス氏は、フル・ネーム（氏名）をDan Hyman Laurenceという。first name（名）はダン。middle nameをH.と書いたり、省略したりすることが多い。筆者は、大学で教えてもらったことはない。しかし、ロレンス氏の学職と人柄に、尊敬と敬愛の気持ちをこめて、よく「ロレンス先生」と呼んでいる。

ロレンス先生には、筆者は4回、お目にかかった。第1回目は、1977年4月に米国テキサス州オースティン市（テキサス大学オースティン校の人文科学研究センター）においてであった。この時、わざわざ空港に出迎えてくださった。第2回目は、1978年2月末から3月にかけてであった。この時、「バーナード・ショー展」を見学した。第3回目は、1991年7月中旬、カナダ国オンタリオ州のナイアガラ＝オン＝ザ＝レイク町で行われたセミナーの時であった。1990年秋に、パンフレットを送ってくれて、少しからだの具合が悪い、と書いてあった。それで、筆者は会いに出かけたのであった。第4回目は、1992年11月、米国ヴァージニア州の南西部のブラックスバーグという町においてであった。ここの州立大学（地元の人「ヴァージニア・テック」と呼んでいるが、実際には工学部はなく、教育学部と農学部がある）で、バーナード・ショーの研究大会が開かれたのであった。

平成14（2002）年2月に、ロレンス先生から手紙をいただいた。大けがをして、今はリハビリ中、とあった。それから2～3カ月後に、すなわち4月から5月にかけての頃に、TLS（タイムズ・リテラリー・サプルメント）の2月中旬に発行された号が日本に到達した。その投書欄に、南フロリダ大学のディートリッヒ教授が、「ロレンス氏は重病で、一人で話すことができないかもしれない」と書いているのを見つけた。

そこで、ここに、ロレンス先生のことを書いておきたい、と考えたのである。

2. ロレンス先生のことなど

1977年4月に、筆者がロレンス先生について知っていたことは、ロレンス先生がバーナード・ショーの①戯曲の全集と②書簡集の編者であるということだけであった。①の戯曲全集と②の書簡集は、次のとおりである：――

① (ed.) *The Bodley Head Bernard Shaw Collected Plays with Their Prefaces*

London : Max Reinhardt, 1970 - 74. 7 vols. [以下、CPPと略す]

② (ed.) *The Collected Letters of Bernard Shaw*

London : Max Reinhardt Ltd., 1965 - 88. 4 vols. [以下、CLと略す]

1977 (昭和52) 年4月、①のCPPは7巻すべてが出版されていた。そして、バーナード・ショーの戯曲の研究には、1960年代まで使われた The Standard Edition にかわって、このボトリー・ヘッドの全集本が「定本」の位置を獲得した。重要な版本ということになる。一冊の値段は、当時は、筆者の月給の10%ぐらいであった。英国版の本（これが日本でも店頭に並んだ）の場合、本のカバー（jacket）がカラフルで、魅力的であった。本の大きさは、横12cm×縦20cm、そして厚さは第1巻の場合、803ページで、3.5cmであった。

一方、②のCLの場合は、第1巻（1874-1897年）が1965年に出版、第2巻（1898-1910年）が1972年に出版された。本の大きさは、第1巻は、横15cm×縦23.5cm、厚さも5.3cm、877ページであった。従って、本の値段も、戯曲全集の1冊よりも3倍ぐらいも高かった。（そして、第3巻（1911-1925年）は1985年に、第4巻（1926-1950年）は1988年に出版された）。

これら2種類の本の編者であるということは、ロレンス氏が文字どおり「大先生」であることを示すものであった。

テキサス大学オースティン校の人文研究センターで2週間弱を過ごしてから、ダラスとワシントンを経由して、英国のロンドンへ飛んだ。

ロンドンのThe British Library（英国図書館、以下The BLと略す）ではじめて知ったことは、第1に英国の作家では、ロレンス氏がヘンリー・ジェイムス著作目録をLeon Edelと共著で1957年に（第3版を1981年に出版していたり）、ロバー

ト・ネイサン著作目録を1960年に出版してたことであった。第2はG.B.ショーに関する本である。The BLのGeneral Catalogue（総合図書目録）を見ていた時、目に入ってきた本は、

① *How to Become a Musical Critic*（1960年、第2版は1968年）

② *Platform and Pulpit*, 1961.

③ (with David H. Greene) *The Matter with Ireland*, 1962.

英国図書館の総合図書目録（以下、GCと略す）は、当時は、大きな台帳のような厚い冊子で、おそらく300巻ぐらひはあったであろう。当時の蔵書は、約900万冊といていた。従って、必要な本の請求番号をみつけるのに、かなり時間がかかった。筆者の場合、The BLのやり方に慣れるのに約2週間かかった。そして、一度この図書館の規則に慣れてしまうと、請求した本は席まで配達してくれるので、勉強はしやすかった。（もっとも、請求した本が Bloomsbury にある時には、その日のうちに配達された。しかし、少しはなれた Woolwichにあるときには、図書館がすいているときで次の日に、図書館がこんでいるときには3～4日かかって配達された）。ところでGCであるが、その1ページ・1ページには、ある時点までの図書名が印刷されていた。そして、たつぷりと余白がとってあった。この余白に、その後に出版された本の名前が、切り張りされて、追加されていた。時には、閲覧者（reader）がその書誌について間違いを指摘したこともあったであろう。追加や訂正が、書き込まれていることもあった。^{※1}

図書目録のページに余白をたつぷりとって、新しく出版された本の名前を印刷して、切り張りして、追加していくというやり方は、（あとになって理解出来たことだが）二百数十年の経験の知恵からうまれたものであろう。

平成15（2003）年は、The British Museum（日本では「大英博物館」という訳語が定着している）が創立250年になる。その図書館部門が、規模が大きくなったので、1973年7月に分離独立して、The British Library となった。そして、1998年6月25日には、The BMの敷地から直線距離で北へ1kmのところに、（実際には道路はまっすぐではないので、1.3～1.4kmはあるであろう）、St Pancras Stationの西隣りの場所に、新館が完成して、女王様がテープ・カットをなさったようだ。このThe BLの建物については、あとでまた少し述べたい。

ロレンス氏は、2002年2月に筆者あての手紙で、単著・共著を含めて全部で49

冊の著書を著した、と書いている。これまでに、1960年代と1970年代前半を見てきたので、1970年代後半から1990年代の代表的な著作を次に見てみたい：――

- ③ *Shaw : an Exhibit*, 1977
- ④ (ed.) *Shaw's Music*, 1981. 2nd edn, 1989.
- ⑤ (Gen. Editor) *Bernard Shaw : Early Texts, Play Manuscripts in Facsimile*, 1981. 12 vols.
- ⑥ *Bernard Shaw : a Bibliography*, 1983
- ⑦ (with Fred D. Crawford) "Bibliographical Shaw", 2000.
- ⑧ (with Nicholas Grene) *Shaw, Lady Gregory, and the Abbey*, 1993.

上の③については、これは、テキサス大学オースティン校で1977年9月から1978年2月まで開かれた「バーナード・ショー展」のカタログ（目録）である。テキサス大学が取得した資料を、(おそらくロレンス先生が主となって関係して)、整理し、公開したものである。筆者は、最後の2日間を、カタログと首っ引きで、展示品を見た。この結果、筆者はオリジナルに対する目を養うことができた。この件は、またあとで、取りあげたい。

④は、バーナード・ショーの音楽批評を集めたものである。これ読むと、1890年代の、ロンドンにおける音楽事情を知ることができるので、関係者の関心を集めた、といわれている。

⑤は、初期の戯曲の本文の問題を扱う。本文が確定するまでの、訂正のあとをいろいろとすることができる。草稿を調べるために、わざわざ英国や米国に出かける必要が減少する可能性が大きくなる。値段の関係で、宇都宮大学附属図書館では購入できなかった。横浜国立大学附属図書館が1セットを所有しているように、見受けられる。

⑥と⑦は、バーナード・ショーの書誌である。バーナード・ショーが書いた草稿や完成した本文など、さらに、ショーの戯曲などを扱った論文や本などの、出版年月日、版などの来歴、印刷の体裁、論文や本の著者などを取りあげている。⑥は1980年ごろまで、⑦は1980年代と1990年代中頃までを扱う。筆者の名前も出ている。

⑧は、当時のダブリン市（現在のアイルランド共和国ダブリン市 ― 1900年

代は連合王国（UK）の中のダブリン市）のアベール座で、ショーの芝居を上演する件などを扱う。著者が、英国や米国の図書館で資料を調査していた時に、時々、グレゴリ夫人の資料に出っくわすことがあった。グレゴリ夫人の手書き原稿は、ほとんど筆者には読めなかった。タイプで打った原稿などは、メモをとることができた。いつかは論文にまとめたい、と考えていた。しかし、この本が出版されて間もない頃、資料も印刷されていたので、米国の女性が論文にまとめあげた。筆者は、もう少し資料を集めて、と考えていたので、がっかりした。このアベール座は、1900年代中頃に、アイルランドでは近代劇運動の中心となった劇場であった。

もう1つ、共著者のグリーン氏について付加えると、米国と日本で、2回、グリーン氏の話聞いたことがある。1990年代中頃は、Trinity College, Dublin（1591年創立。イングランドの外では、最初に創設された大学）の国文学科（Dept. of English）の主任のような仕事をしていて、忙しそうであった。米国では1992年11月のバーナード・ショーの研究集会の時に、日本では1996年9月に東京と徳島でアイルランド文学の話聞いた。個人的にも、ビールを飲みながら、話をした。このグリーン教授が日本にきたことを短かく書いて、新しい会報*GBS*を送る時に、ロレンス氏に1997年7月に手紙も出した。絵ハガキの返事がきた。“How nice that you had a chance to see Prof. Grene in Tokyo. I have made plans to visit Ireland again in November.”（1997年8月11日付）。最後に、グリーン先生の姓の綴りについて、中世英語のなごりを想像させたので、筆者は興味を感じた。

ロレンス先生の絵ハガキは、ロンドンのThe Royal National Theatre（国立劇場）の絵ハガキであった。1992年秋に、一番大きなオリビエ劇場で上演された、バーナード・ショー作『ピグマリオン』の一場面の写真（白黒）であった。Frances Barber, Alan Howard and Gillian Bargeの3人が登場しているので、換言すると、ヒギンス教授の母親、ヒギンズ教授、エライザが舞台に登場しているので、最後の第5幕の一場面であろう。

以上は、ロレンス先生の主な著書を取りあげたものである。次に、第2として、ロレンス先生の経歴などに少しふれておきたい。

資料として、ロレンス先生が*WHO'S WHO 2000*に提出した原稿の写しを使う。これは、筆者が希望して、送っていただいたものである。この結果、筆者は、1989年版、1993年版、そしてこの2000年版を見たことになる。もう1つ送ってい

ただいたものは、写真である。筆者がはじめてお目にかかった頃に撮影した写真とかで、背広を着てネクタイをしめた先生の写真であった。すでに公開された写真だという。

次に、学歴や職歴など主なものを列挙してみると、次のとおりになる：—

- ① Literary and Dramatic Advisor, Estate of George Bernad Shaw, 1973-90.
- ② b. 28 March 1920, in New York City.
- ③ First went on the stage as child actor, 1932.
- ④ Educ. New York City public schools ; Hofstra Univ. (BA 1946); New York University (MA 1950).
- ⑤ *military service* radar specialist with Fifth Air Force, USA, in South Pacific, 1942-45 ; wrote and performed for Armed Forces Radio Service in New Guinea and the Philippines during World War II , and subseq. for radio and television in USA and Australia.
- ⑥ *teaching* graduate asst. New York Univ., 1950; Instr. of English, Hofstra Univ., 1953-58 ; Editor, Readex Microprint Corp., 1959-60 ; Associate Prof. of English, New York Univ., 1962-67, Prof., 1967-70.
- ⑦ Vis. Professor : Indiana Univ., 1969 ; Univ. of Texas at Austin, 1974-75; Tulane Univ., 1981 (Mellon Prof. in the Humanities); Univ. of BC, Vancouver, 1984; Adjunct Prof. of Drama, Univ. of Guelph, 1986-91 (Dist. Vis. Prof. of Drama, 1983).
- ⑧ Vis. Fellow, Inst. for Arts and Humanistic Studies, Pennsylvania State Univ., 1976.
- ⑨ Literary Advr., 1982-90, Associate Dir., 1987-[2001], Shaw Fest., Ont.
- ⑩ *Recreations* : theatre-going, music, mountain climbing.

上の略歴を見ていると⑤の軍務が目にとびこんできた。南太平洋で軍務に従事したということは、先の第2次世界大戦の時に、日本軍と戦ったということであろう。故ケネディ大統領や前ブッシュ大統領も太平洋で従軍した、と聞く。ロレンス先生の場合は、「学徒出陣」であったのではないかと推測する。しかし、ロレンス先生とは、今までに、戦争の話は一言も話題になったことはなかった。

⑦と⑧について。1970年に大学を退職して、ショー研究に専念することになった。1977年4月にオースティン市でお目にかかった時に、「客員教授しかやらない」といっておられた。Tulane Universityで客員教授を務めた時には、New Orleansから葉書をいただいた。1978年3月にSan Antonio市でお目にかかった時に、New Orleansの話がでたことを思い出してハガキをくださったのかもしれない。

①と⑨が、大事である。①のestateの意味は、「遺産」、「財産」である。そこで全体の意味は「バーナード・ショーの遺産」となる。ここには、著書が売れたり（著作権の「印税」のようなもの）、戯曲を上演すると（ロイヤルティ、「使用料」のようなもの）、それぞれお金が入ってくる。このお金は、必要な経費を差し引いて、残りを、遺言に従って、3つに分けて支払われる。しかし、その大部分はThe British Museumへ行く。そこで、大英博物館では売店を"The Shaw Shop"と呼んでいたが、十分な理由がある訳である。さて、元にもどって、日本人に理解しやすく訳せば、「バーナード・ショー財団」とでもなるのであろうか。とにかくロレンス氏は、この顧問のような仕事をしていたのであろう。

⑨は、カナダ国オンタリオ州ナイアガラ＝オン＝ザ＝レイク町のショー・フェスティバル劇団で、芸術顧問をやったり、副演出家のような役をやっていたのであろう。カギカッコで[2001]を、著者が付加えた。平成13(2001)年に、大けがをなさったので、カナダの仕事もおそらくお辞めになったであろうから。(参照：島村「カナダの演劇祭」, in 宇都宮大学外国文学研究会『外国文学』第48号(1999年3月), pp.57-60)。

③は、少年時代から青春時代にかけて、ニューヨークで舞台に立ったことがあるようだ。このことから、⑩の趣味は「観劇」というのも、十分に理解できよう。

3. おわりに

平成14(2002)年2月中旬に、先生から手紙をいただいた。大病をしたのに、わざわざタイプを打って、書いてくださった。実はこの1年前の2001年の初夏の頃に、転居通知をいただいた。その返事に、筆者がロンドンの研究大会に7月中旬にでかけます、と書いた。前にも、ロンドンから手紙を出したことがあった。そこで、先生は、もしかしたら筆者が手紙をロンドンから出したのに、入院して

いて、その手紙が先生の手には渡らなかったのかもしれない、と判断なさったのである。米国のテキサス州サン・アントニオ市から埼玉県さいたま市東浦和まで、航空便の手紙は10日かかる。従って、手紙を2002年2月初旬にお書きになったことになる。

手紙の内容は、①ある日、散歩に出た時に、めまいがして倒れ、運悪く、コンクリート製のベンチに頭をぶつけたが、幸いなことに、すぐに人が気づいて、救急病院に搬送し、手術を受けさせてくれ、2月上旬には元気になってリハビリ中、とあった。次に、②倒れた時に手がけていた仕事は、その残りを、資料と共に、カナダの友人に頼んだ、とあった。そして、③これからは研究ができない、それまでに書いた本は、単著・共著を含めて全部で、49冊になる、という。④退院後は1人で暮らすのはあぶないので、子供に面倒を見てもらう、とあった。

その後、2～3ヵ月たって、4月から5月の頃に、*TLS* (*The Times Literary Supplement*) の2月の中旬のころの号の投稿欄のページに、南フロリダ大学のR.F. ディートリヒ教授 (Dietrich, ドイツ系アメリカ人か? 独語式に読んでみたが、正式の発音は不明) が、投書していた。そのはじめのところに、「ロレンス氏は重病で、話ができないかもしれない」と書いてあった。

以上のようなことが、筆者に本稿を書かせたのである。

本稿で扱えなかったところは、筆者の、ロレンス先生との出会いであった。ロレンス先生が、何を読んでショーにひかれたか、米国ショー協会で機関誌の編集にたずさわったこと、米国ではロレンス先生の学問に対して尊敬が払われていたこと、ロレンス氏が文学研究の土台のところ (本文批評や書誌など) を十分にかためたので、米国でショー研究がさかんになったのだ、と筆者が理解するようになったことなど、稿をあらためたいと思う。

最後に、私の希望は、ロレンス先生にバーナード・ショーの自伝を書いていたきたかったということである。

Notes: —

1. The BM や The BL の総合図書目録 (GC) は、次のとおりである。

1. The BM : Dept. of Printed Books, *General Catalogue of Printed*

- Books to 1955*. London : The British Museum, 1964.
2. *General Catalogue : Ten-Year Supplement, 1956-1965*. London, 1968.
3. *General Catalogue : Five-Year Supplement, 1966-1970*. London, 1972.
4. *The British Library General Catalogue of Printed Books to 1975*.
London : The British Library, 1985. (省略は*BLC to 1975*。
以下は略称を用いる)。

5. *BLC 1976 to 1982*. London, 1983.
6. *BLC 1982 to 1985*. London, 1986.
7. *BLC 1986 to 1987*. London, 1988.
8. *BLC 1988 to 1989*. London, 1990.
9. *BLC 1990 to 1992*. London, 1993.
10. *BLC 1993 to 1994*. London, 1995.
11. *BLC 1995 to 1996*. London, 1997.
12. *BLC 1997 to 1998*. London, 1999.
13. *BLC 1999 to 2000*. London, 2001.

英国の図書についての記述（書誌）は、The BLのGCの記述が正確、または、正確に準ずる記述である、と判断される。

1998年6月下旬に開館したThe BLのReading Roomの壁面または壁面に近い場所には、これらのGCと参考図書が配架されていた。The Library of CongressのGCも、配架されたいた。2時間ぐらいしか、この閲覧室にいられなかったので、間違いがあるかもしれないが、昔の台帳式の、大きなGCは姿を消して、コンピューターによる検索が取って代わったように判断される。

(2003年1月)